

tact_web_interview

京野健幸さん

1985年生まれ。大学院でのルワンダ農村研究をきっかけに日本の地方に興味を持つ。秋田に移住後、地元ホテルの経営を担うとともに、地域資源を活用したイベントや事業を展開。全体ディレクション、サービスデザイン、オペレーション設計担当として合同会社U設立に参画。

取材日時 2025年2月12日

本村さんは2018年の冬にお会いしました。ヤマモ味噌醤油醸造元さんからお誘いいただいて、行ってみたのがきっかけです。私は大学でルワンダのことを研究しており、その時に本村さんがルワンダに行かれたというお話を聞いて、大変盛り上がりました。

その後、発酵をテーマにしたイベントを開催しようという話になり、ヤマモさんの蔵を活用し、イベント主体としての会社を立ち上げることになりました。2018年8月に会社を設立し、11月には最初のイベントを開催しました。

私自身は長年ホテル業に携わってきましたが、シティホテルは結婚式やレストランなど、地域の方々に利用していただくことが多い業態です。そのため、地域の活気が失われ、衰退していく様子を肌で感じており、事業環境としても厳しくなることへの課題感を持っていました。地域を盛り上げていくことが、本業にも繋がっていくことを感じていた点も大きいです。その思いが、本村さんがやろうとされていたことと合致していました。私が地域サイドで得てきたリソースも、うまく組み合わさせて動き出したという感覚です。

最初の頃は、「本村さんはすごい人なのだろうな」という思いもあった中で、一緒に仕事を始めました。「何でもできる人」のように勝手に思っていた時期もありましたが、やはりそのような完璧な人はいないということを、一緒に仕事をする中で感じるようになりました。得意な部分とそうでない部分が、本村さんにも私にもあることが見えてきました。だからこそ、一緒にやるからこそ、大きなインパクトを残せる可能性があるのだと改めて実感していました。彼の動きに期待するというよりは、自分が主体的に関わっていくこととして、自分ごととして捉えていました。

ずっと地方にいると、世界が閉ざされているわけではないのですが、見えないフレームに囚われていたのだろうなと、今は感じています。本村さんと一緒に仕事をしていく中で、そういったものの存在に気づくことができましたし、囚われてはいけないとも強く思いました。本村さんからは刺激やアイデアが次々と出てくるので、やはり「この人は面白いな」と常に感じていました。形にできたら最高だと願いながら、自分も負けないようにしっかりと成長して、一緒に作り上げていくことが大切だと考えるようになりました。

*

それからも4回、定期的にイベントを継続していました。一番最初のイベントが最も規模が大きく、中心的に動いてくれる方が複数いらっしゃいました。それ以降は、イベントごとに人数を組成し、内部、外部、インターンの方々が関わる形でした。

本村さんには人をワクワクさせるのがお上手なところがあるじゃないですか。その部分を強調してお伝えすることで、多くの方を巻き込んでいきました。とつかかりは、「面白そうだな」といった感覚

だと思います。ワクワクするとか、「すごいことになりそう」といった期待感です。そこからスタートして、どのように自分が関わっていくかの設計が重要になります。プロジェクト全体でやろうとしていることと、その中で関わる人々の興味関心をうまくベクトル合わせていくことです。

様々な方が関わっていく流れの中で、私たちのリソース不足も含め、濃淡はありますが、かなり余白のある形で進めていったため、関わる方もある種の主体性を求められる形になりました。自分で考えて動かないと、細かい指示が出てくるわけではないからです。これは狙っていた部分もありますし、そうせざるを得なかった部分もあります。

発酵をテーマにしたことで、一人ひとりが主体的に動き、それが集まって大きな形になっていくということはイメージしていました。全体のビジョンをしっかりと理解していなかったとしても、イベントに巻き込まれていく中で、自分が主体的に関わったという思いを持たれた方は、少なからずいらっしゃるのではないかと思っています。

トップダウンで上の人気が決めて行うのが良いチームビルディングではないことは、元々そう思っていましたし、イベントを通じて試みたり、ホテルでも本村さんに入っていただき、そのようなチームを目指して取り組んできました。そういう形で関わった方たちには、イベントが終わってからも何らかの変化をもたらすことができたのではないか、と感じています。今、自分も別のフィールドでそれを実践しようとしています。

*

変化が持続しているかという点では、イベントは4回で休止してしまっているため、持続はできていない感覚があります。地域にとっては、外部からの刺激が非常に重要です。人の動きが少ないため、何もしないと沈殿してしまいます。それを動かすきっかけが、イベントという機会でした。イベントを通じて変化された方を具体的に挙げますと、沼倉くんという、シルクスクリーンプリントを手掛けている会社の後継者がいます。当初からイベントに関わっていただき、良い刺激を受けてくれたようです。当時からかなりレベルアップして、現在活躍されています。

他にも、イベントの際にヤマモさんの近くにお住まいのおばあちゃんたちにお手伝いいただき、外から来た方々をご自宅にお招きして、地域の郷土料理でおもてなしをしました。そこで関わってくれたおばあちゃんたちは意識が変わり、「イベントはいつ次やるの？」とおっしゃいながら、なかなか開催できない中で、自分たちで地域の食を体験できるイベントを企画し始めたりしていました。

*

いま私が取り組んでいる羽後町のプロジェクトはスケール感が非常に大きく、蔵が4棟と母屋が残っており、まさに地域の名士のご自宅の規模感です。通常、家を譲るというケースはなかなかないため、そのような物件にアクセスできる機会は貴重です。家業があって家を改修できるケースはあるかもしれません、譲り受けた人が所有者の意思を尊重しながら変えていけるというのは、そう多くありません。所有者がギリギリまで持ち��けて、建物が傷んでしまい、どうしようもなくなってしまうことが多いのです。

羽後町でこのスケールの建物を活用する成功事例を作り、オーナーにも喜んでいただけることを示せれば、他のエリアで困っている方々にも助けになれるのではないかと思っています。こうした物件は全国にたくさんあるのだろうと感じています。高価格帯の方々が来てラグジュアリーな空間を提供するだけでなく、地域の方々にも滲み出していくような、地域の名士のご自宅を通じて地域が再生していく、そういうことが実現できれば、新しい取り組みになるのではないかと思っています。

(聴き手:酒井一途)